

Ⅲ 研究開発の内容

① 3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）

第1回 運営指導委員会

日 時：令和5年5月31日(水) 13:30-15:30

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、柳本委員、永野委員、山田主事
森本校長、横山教頭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、委員長・副委員長の選出

資料説明（本事業説明）、協議

協議題：①普通科改革支援事業のロードマップと今年度の進め方

②総合人文コースの生徒の変化(自分が理系と考えている生徒が17名入学など)

③現在の取り組みと今後の計画・ビジョンについての指導・助言

協議内容

柳本委員

御影高校生は、勉強も部活動もどちらも力を入れつつ、基本的な生活習慣も確立できており、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が高くなっているように感じている。新しい探究の授業を入れていくことで、自分自身で調べに行き、講話を聴く機会があり、自分自身で探究を深めて未来を切りひらけることが素晴らしい。学科だけでなく、普通科でも実施してほしい。この方向性で進めてほしい。20代の社員は非常にストレスに弱い。7割がネガティブと答える。思い通りにいかないストレスやネガティブな考え方が蔓延している中で心の背骨をしっかりすることを高校生活の中でやってほしい。若い社員と御影高校の生徒との差がわからない。企業で言っていることが高校生に伝わるのか知りたいので授業をして反応を見たい。

永野委員

探究活動を通して若い人たちが地域に愛着をもってくれたら嬉しい。そうすれば、地元に戻ってきてくれるのではないかと。インターンシップで市内の高校生がやってくるが、御影高校の生徒は中心的な存在になる。今後、このカリキュラムが始まったら今の御影高校生とどんな変化がみられるのか。

椎木委員

「出会う」「実践する」「挑戦する」「固める」というプロセスが良い。全国に広がってほしい。探究で学んだことを実社会と結びつけて、授業に落とし込んで、またさらに探究活動に落とし込めたら良いと思う。将来は誰かのために何かしたい、何かに貢献したいと高校生なりに他者や世界について考えられている御影高校生がいて良かった。探究の最終的なアウトプットの形を変えるのはどうか。ある高校は生徒が学校の動画をつくっている。ラーニングコンテンツ、つくることが一つ。ゲームやアプリでも良い。AIと共に生きていく中で、文章を書くことはAIがやってくれるので、文章を書くことをゴールにするのではなく、クリエイティブに自分たちが作っていくことを重視しても良いのではないかと。成果物をつくるのが他者との学びになるのではないかと。発表先を社会にするイメージで。

甲元委員

1年間の振り返りを聞いて、これから先、社会のゴールが変わっていく中で、同じことを継続していくことはナンセンス。先生もゴールを探究していく必要がある。より良い正解は変わっていく。様々なコンテンツがあるが、今の生徒がそのコンテンツに対してどう思っているかアンケートをとって、拾い上げる必要がある。Cross I でやったことがどこで役に立ったのかをアンケートをとっていくと振り返りがしやすくブラッシュアップできる。調査活動はAI ができるが、高校生がそれをするときAI を鵜呑みにしてしまうので、使わないのではなく、使っていく中でどう活用すればよいかを教える必要がある。イベントを並べるだけではなく、イベントに対する位置づけをはっきりさせて、何を学んでほしいかを明確にする。

菊地委員

カリキュラムの組み方についてはよくできていると思う。文理探究科が始まってから子どもたちがどう成長していくかを見ていくことが大事。探究の授業での気づきを教員同士で共有していく必要がある。タブレットを使うのは上手。探究そのものをみたときに、ネットの世界に捉われている感じがする。ネットやテレビで見ている世界を信じ込んでいる面が見える。

前田委員

注意する点が3点ある。①最後のコースの生徒たちに、学科の改編を否定的に捉えさせないようにしてほしい。コース生の満足度が次につながる。②カリキュラムについて。カリキュラム表を見るとあまり特色が見えない。表に表れない部分をいかに説明するか。③目指すゴール。多様性を求めると収拾がつかなくなる瞬間がある。そういう場合は基本理念に戻り、軌道修正する。

菊地委員

カリキュラムについて。普通科と比べたときに特につけたい力はどれか。

→言語表現スキル（どう伝えるか）、協働性の2点。

課題解決能力をどう育てるか。高校生も大学生も問いを立てることが難しい。解決に焦点を当て過ぎず、発見することや問いを立て続けることを大切にしてほしい。ハードルの設定を明確に。

橋本教諭

「文理探究科」という学科名は御影高校の独自の名前として、会議や生徒アンケートを通して検討し、決定したが、学際領域に関する学科について県全体で統一して使用されることになった。

第2回 運営指導委員会

日時：令和5年10月27日(金) 14:00-16:00

場所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、永野委員、柳本委員、山田主事、森本校長、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭、竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（事業進捗報告）、協議

協議題：①御影高等学校普通科改革支援事業の進捗状況

②全国の発表会・研修会の状況

③現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

協議内容

①御影高等学校普通科改革支援事業の進捗状況

永野委員

探究活動を市長に発表することを知らなかったので大変驚いた。また、若い方々の力が必要になった際は、御影高校にも力添えいただきたいと思っている。

甲元委員

“御影のええとこプレゼン“の着眼点についてだが、幼少期から過ごす地域の良さを感じることができるものであると良いと思う。また、1年生の探究学習の活動が2年生の探究学習の活動へと繋がる様にすべきだと思う。クリエイション講座は、1つの事象を深く捉える講座や1つの視点を多様な視点から捉える講座などを用意すると聞いている。良い方向なのではないか。

東コーディネーター

講座の内容については、設定されたテーマと企業のバランスを考慮しながら構想している。クリエイション講座は、企業に対してオリジナリティを求めるという点が難しい。講座の中で設定されたテーマについて、複数の講師から高校生へ説明することで、設定されたテーマの一端が見える様な構想にしたい。高校1年生の間に、1つの事象の答えが、1つでないことを経験することで、次年度の探究学習の活動へ繋がると考えている。

柳本委員

企業経営の立場から辛口となるが、若者の自分で考える力を引き出すことが重要であると思う。現在の探究学習の活動は、社会課題の解決策を社会に対して提案することで、大人から高校生が、ちやほやされることがあったり、学生だからこんな提案ができる、面白いことを言えば喜んでもらえるといった側面があるように感じられる。学生の思考を深めるためには、終了後に適切なフィードバックを行うことが必要だろう。竹の活用に関する探究学習についても、何故、現在まで竹が放置されてきたのかという背景を考慮しなければ、社会での実現可能性は低くなる。今まで試行錯誤してきた経験者が、一定のフィードバックを高校生に実施することで、次のステップに繋がるのでは無いかと思う。高校生が、できない理由に対する困難を乗り越えることで、知識を深めることができる。社会課題解決は、簡単に実現するものではないことを学生に気づかせることも重要かと思う。テーマを深く捉えながら考えることは、社会を良くする能力に繋がるため、高校生たちには頑張ってほしいところ。

東コーディネーター

竹の活用などの探究活動が、発表のみで活動が終了してしまうのが、非常にもったいない気がしています。

森本校長

市長も本校生に、厳しい意見をフィードバックされることはなかった。また、高校生の発表に関しては、学内で事前に発表を経験してから市長の前でのプレゼンを経験した。事前の学内発表時には、教師から厳しめのフィードバックをもらい、その上で市長への発表に臨んでいる。私は、竹の活用の探究学習を見て、高校1年生が、自分たちの意見が社会で役に立つのだという実感が湧くことが重要ではないかと改めて感じた。

甲元委員

市役所との連携で行う竹の活用の探究学習に関しては、兵庫県内の数校で実施されている。他校と交流を行いながら、探究学習の活動の比較を高校生ができれば、より学びが深まるのではないかと考えている。

菊地委員

探究学習は、今回の市役所の案件のように、飛び込みのような案件ばかりになると、学内の探究学習が疲弊する原因になる。学内で、次の探究学習につなげる準備をしていると、活動しやすいかと思う。高校の授業の一環であるため、何に気づく授業なのか、何を反省する授業なのか明確にする必要がある。いろいろ体験して身につけて、高校のテストなどで再度言語化できるか確認するなどして、どこまでを求めるのかを設計段階で決めるとより良いだろう。

前田委員

発表後の Q&A の質が、探究のレベルの違いとしてはっきり出る。発表の後を充実させていただくことで、学生の探究のレベルが上がっていく。探究学習に大きくかかわっていない先生方の雰囲気はどうか。

橋本教諭

一般クラスの探究に、コースの探究をどのようにポジショニングしていくべきかについて学校組織を立ち上げて、話し合いを行っている。探究の問題点や状況は、共有し、学年代表から学年会議で周知している状況である。共有の場を設けていることもあり、認知の深まりは感じているが、各教員が積極的に参加したい実践したいというレベルにまでは達していない。

椎木委員

探究学習は終わりなき旅で、完結するものではないと思う。そのため、発表会・報告会で、「発表する」よりも、プロセスを重視した方が良いと考える。生徒には、そのプロセスが自分の人生にどのように生きるかを考えて欲しい。また、現在の探究では、一つの成果を発表しなければいけない風潮があると思われるが、高校生にとっては結論付けるということが難しい場合があることも考慮すべきである。

②全国の発表会・研修会の状況

山田主事

全国コーディネーター研修に参加している。研修会に参加することで、地域からコーディネーターを派遣している学校も存在していることが判明した。コーディネーター同士の横のつながりの重要性と、探究についてや、改革についての情報が、全国コーディネーター研修会の中で周知されている感じはする。情報交換の場では、地域から派遣されているコーディネーターの色が強い感じもする。地域とどうかかわって探究していくかということについては、地域からリソースを提供しなければ、学校は独自に活動することが難しいだろう。全国コーディネーター研修会を通じて、関係者との目線合わせと情報共有をすることが各校での活動の主軸になると感じている。

前田委員

朝来市の高校で 13、14 年前に校長をしていたときは、島根県のコーディネーターが配置されている高校に見学に行って参考にした。御影高校なりのコーディネーターとしての役割を尊重した方が良いと考える。あまりコーディネーターの業務を画一的に考えない方がいだろう。

甲元委員

普通科改革支援事業の予算終了後に、現状のまま、自走は可能なのだろうか。資金調達を行うか、もしくは、資金負担の無いようなシステムに変える必要があると考えている。私自身、コーディネーターがいることは有用だと感じている。コーディネーターをうまく活用することで、普通科改革線事業予算終了後も自走可能になっていくだろう。

森本校長

従来の学校ではできなかった学びを継続するために、兵庫県教育委員会からは win-win な関係を学内外で構築するようと言われていた。しかし、win-win な関係だけで講師を引き受けてくれる人物はいない。現在御影高校が行っている改革の動きは、持続可能性を持って次年度以降も進めたい意向である。そのため、兵庫県教育委員会には引き続きの支援を依頼している。普通科改革支援事業予算が終了し、新たな予算の獲得が難しい場合に、コーディネーターを雇わない方針で現在の取り組みを教員らで進める必要が出てくるかと思うが、現状を見ているとそれが実現可能か否か不安である。

前田委員

地域からコーディネーターを派遣することが困難であることは理解しているが、その困難を打破しないといけない。1 人のコーディネーターが近隣の複数校を巡回するような方式にすることも検討しなければいけない。

竹中コーディネーター

実際に、前田委員がおっしゃる通りに活動している地域もある。SSH の学校などを見ていると、コーディネーターがいれば、学校自体がレベルアップすることが可能だと考えている。兵庫県を挙げての改革として、ご支援いただきながら進めたい所存。コーディネーターも年間 50 週、もしくは、52 週分の勤務時間を確保してほしいと考えている。現時点では、週 1 度 7 時間働けたら良いのではないかと。

柳本委員

兵庫県が民間を入れていくようなさまざまな取り組みをしていると聞いている。兵庫県の教育の質を改善していくものに、みんなが力を出すということはできるのではないかと考えます。その仕組みを構築し、必要性を伝えながら取り組みを進めることで、便乗する協力者や協力企業が出てくるかもしれない。民間を活用する方法をよく考えた方が良い。

椎木委員

柳本委員がおっしゃることに近いことを考えていた。30 年後の未来を考えた際に、海外の方々と共に教育推進を行う可能性もある。民間の方々に教育の現状を共有し、お互いに把握するのが良いのではないかと。

③現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

柳本委員

スキルを学ぶ、分析して何かを学ぶという技量を磨く部分と、自分の人生に結び付けていく立志の部分があると思うが、立志の部分に焦点を当てた学習を行うことで、熱量が高まると思う。立志重視の探究学習の活動を検討するべきだと考える。

東コーディネーター

予算の補足ですが、講師料は、今年度1日7時間に対してお支払いした。しかし、当日運営や打合せ、内部調整、外部調整、振り返りといったたくさんの手間をかけている現状である。そのため、現在支給している講師料は、最低限でも確保できる状態が好ましいと思っている。本年度の講座全体で50万円程度が費用としてかかった。来年度以降については、現在思案中であるが、講座全体で100万円程度用意することができれば、資金も潤沢かと思われる。限られた予算内の活動は、講師の善意に頼るところも出てくるので、金銭以外のベネフィットを考えなければならない。またコーディネーターの給料形態については、時給制よりも年俸制のような方式を導入することで、コーディネーターのモチベーションにもつながる可能性がある。

山田主事

御影高校の学びを最低限保証する観点で、県の魅力アップ事業の制度を設けている。また、「資金が必要」と声を上げるだけでなく、具体的な概算を提出してもらいたい。また、今年度は、御影高校が、関係各所との関係構築を行う1年になれば良いと思う。提示された概算の妥当性を鑑みつつ、魅力アップ事業の対象となる取組に焦点を合わせて提出いただけるのであれば、本年度中に次年度の分の申請を出していただきたい。御影高校側で優先順位をつけて、必ず必要なところを優先に資金を投入していただきたい。

第3回 運営指導委員会

日時：令和6年2月27日(木) 14:00～16:00
場所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム
出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、永野委員、柳本委員、山田主事、森本校長、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭、竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター
内容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（事業進捗報告）、協議
協議題：①御影高等学校普通科改革支援事業の進捗状況 ②全国の発表会・研修会の状況 ③現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

協議内容

■御影高等学校普通科改革支援事業の進捗状況

グローバルコンシャスデイに協力いただいた柳本委員からの感想

最初の講義とワークショップは課題をインプットした時間だったのかなと思う。自分たちのクラスに戻っての生徒の振り返りを見ると、聞き齧りの断片的な話しか伝わってないなと感じた。自分のものになっていない。同じ話を聞いた生徒同士でアウトプットの時間を挟んだ後に、クラスで共有する様にした方が良いのでは無いかと思う。高校生が、これまでに意識していなかった課題を認識し、課題に対して自分は、どう思うかというところを学ぶためにもう1段設けても良いかと思う。

Creation I の先行実施にかかる事業「テーマリサーチ B」に協力いただいた椎木委員からの感想

高校生は、社会課題に対する興味関心がまだ無いという傾向が強い。高校生にどの様に興味を持ってもらうかというところが設計のポイントなのだと思います。今回は、高校生が苦手なものを逆手に取ったプログラムの構成にしました。小学校・中学校では社会課題を自分事として意識的に感じる機会がない。社会課題を意識してもらえそうな工夫が必要だと思う。

コーディネーター研修・全国発表等について、山田主事からの補足

コーディネーター研修に、1年間参加。研修内では、コーディネーターは、こうあるべきという理想とされるものはないということが周知されている。学校に対してどういった貢献が求められているのかについて、コーディネーター自身で考慮しながら活動することが求められており、曖昧な部分が多く非常に難しい立場にあるが、我々も支援を続けていきたい所存ではある。また、教育予算上での支援については、できる限りの支援をしたい気持ちはあるが、実際のところ潤沢にいくらかでも支援可能というわけではない。普通科改革支援事業で実施した取り組みに、実際の効果があったのかの検証やより効果のある取り組みは何か検証しながら取捨選択する必要があると思う。支援の優先順位をつけて行く最後の一年にしていきたい。また、コーディネーター研修では、外部から来たコーディネーターと学校内の教員をつなぐ役割が必要だという話も聞いた。普通科改革支援事業終了後に、校内の先生がコーディネーター業務を担うのかについては、学校によって最適な形態も違うので、どのような形態が御影高校にとって最良であるかについては引き続き検討が必要である。文科省から注目されていることも理解しているので、最終年度に向けて事業の効果有無を評価していただけたらと思う。

■現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

椎木委員

入試倍率の確保を続けていくことが必要かと思う。しかし、総合人文コースが始動して4年後以降は入学志望者数が低減していることが資料からも読み取ることができる。この新しい特色ある学科が始動し始めた後の志願者率が低くなるサイクルについて、今回の文理探究科でも同様の現象に陥るのではないかと思う。志望者数が減少した原因は判明しているのだろうか。例えば、広報活動の頻度が低迷していたことや、社会のニーズと合わないといった状態にあったのか。

橋本教諭

入試方式の変化による増減でないのであれば、“文系のみ”入学可能という点が制約になっていた可能性はあると思う。また、景気が良くなると文系志願者が多くなり、景気が悪くなると理系志願者が多くなるとはよく言われる。総合人文コースは、中学校3年生の12月に「文系進路を選ぶのだ」と決心できた生徒が入試を受ける形態だったため、そのような点も考慮するべきかと思う。

甲元委員

開設して初年度は、入学志願者数も盛況になるが、一定年数経過することで飽和してしまうと広報も教育活動も同じことの繰り返しになる。同じ教育活動を繰り返すことは広報的には目新しさが無い。そのため、目新しさを感じるような発信の仕方やコンテンツの作り方に変化が必要かと思われる。

椎木委員

広報も外部の人材に依頼し、いろいろな方法で発信していくことを検討したほうが良い。

東コーディネーター

note という Web サービスが行なっている学校推進事業に採択されたので、来年度から新しいメディアコンテンツでも御影高校の取り組みは発信していく。ここでは、生徒発信の情報や日記の様なものも発信していこうと思っている。note の運営会社から、何を投稿するべきかといった面への支援もしていただけるようなので、活用していきたい。

柳本委員

企業側から求められる成果はなんなのかを考えたときに、モチベーションを維持することや高めることが重要になると考えられる。どのような活動を設計し、どのような高校生を育成したいのかという点では、従来の学術を学ぶ形式よりも、探究的な学びを活用することで、高校生の潜在的な能力を引き出しつつ、学力が向上し、大学入試に直結する学力の向上や獲得点数の向上につながる様なモチベーションの向上が必要なのではないかと思う。ここにいる改革支援事業の中心軸になっている教員の方々以外の教員や御影高校以外の高校の関係者全員でその様に目指していくべきである。広報をすることで人気を獲得していくことも必要だが、「カリキュラムのこれがあるから御影高校は入試にも強い」という話ができたら卒業生としては、ありがたい。育てたい生徒像に応じて、徹底して考え抜くことができる生徒の育成が何よりも重要。

竹中コーディネーター

柳本委員からのご指摘に関して、御影高校は探究的な学びに関わっている科目は他校よりも非常に多い。説明資料にも記載があるが、文理探究科も普通科で開講する科目も考慮しつつ、分野横断の学びの実現を目標としている。柳本委員は、高校生のそもそもの本質も鍛えるべきであるのご助言いただいたのだと思う。

東コーディネーター

なかなか働いている方々には実現が難しいと思うが、ワークショップや講義を実施する側が実践方法を学習することも必要かと思う。

甲元委員

学習活動の中で、動画を作る活動なども取り入れると良い。特色科からどの様に普通科へ学びに波及させるかを検討する必要がある。特色科と普通科だと時間数の問題などから、そもそもの考え方が違う。このような考え方の違いを是正し、校内全体へ探究的な学びの価値を訴求していくために、探究活動内で動画を活用し、ループ再生などでも良いので、校内で共有するべきかと思う。プライバシーの問題で実現できるかどうかなども、検討しないといけないが、DX ハイスクールへ向けた取組みにもなるだろう。このような事前の取り組みを DX ハイスクール事業の申請書に書くことも可能になる。

東コーディネーター

他の事業採択校で、探究の成果を動画で撮影することを前提に活動されている学校がある。

前田委員

高大連携などで、いくつかの高校を見ている。1年次から自由設定の探究をするところも多いが、探究の基礎的な学びをさせるところにテーマを決めて、学び方を学ぶスタイルは御影型という独自のスタイルで良いと感じた。入試倍率2.4倍という最終結果は、広報活動の大きな成果の数字かと思われる。在校生による広報をより活用できれば良いと思う。学びの先行実施に関わった生徒による活動の報告などを通じて、学校全体が本気で改革に取り組んでいることが伝わっているのではないかと強く感じている。総合人文コースの生徒の学びが非常に良い成果となって、地域に伝わっている結果でもあるのではないかと思う。

山田主事

教える側のトレーニングについて、学校の先生方も入っていくべきかと思う。探究活動の成果がポスターで終わりがちというところが話あわれているので、自分たちがどのような取り組みをしてきたのかコンテンツ制作をするのが良いのではないかと思う。県の魅力アップ推進事業で、コンテンツ制作をすることでも申請が可能なので、検討して欲しい。

竹中コーディネーター

地域の題材をメインにしなが、探究活動のプロセスを学べる様な設計になっている。

橋本教諭

地域の課題研究に関しては、神戸大と連携してノウハウも積み上げてきている。神戸大学文学部の学生は、地歴科教育論の一環として御影高校に来校していただくが、地歴科教育論を本質的な内容とするためには、検討が必要かと思う。本県の教員採用試験の倍率低下に危機を感じているので、学生に対して教員の魅力を伝えられるようなことも視野に入れつつ検討することが必要かと思われる。また、生徒にはさまざまな探究活動をさせているが、積み上がりを意識してもらえているかどうかはまだ不安だ。今後は、連続性を意識した指導を行いたい。

甲元委員

活動の連続性を生徒に理解してもらうために、ポートフォリオの作成やリフレクションの活動が必要かと思う。探究的な学びがオムニバスのにならない様にするには、前回と比較して注力した点などを意識させることが必要かと思う。

柳本委員

最初に扱うテーマとして、地域は無難かと思うが、経営やテクノロジーという他のことがなぜ出ないのかと思う。本当に興味のあるものは、地域なのかは確認すべきである。

森本校長

自分から興味関心を持って大学などで学んでいける様な生徒を育成したい。これは、橋本教諭とも以前から話をしている。私は、本校が掲げる育てたい生徒像の実現を可能にするのは、探究だと思う。校内教員の中でも探究に対して高い意識を全員が保持しているというわけではないが、文理探究科が始動することで、学校が一丸となれば生徒も大きく変化すると思う。探究の研修会も今年度実施しているが、来年度も研修を開催し、探究が大事だということは発信していきたい。今は、学際的な学びが特殊なので、注目されているが、今後は、学際的な学びが一般化されていくと思う。

御影の文理探究科で学んだ子たちがどのような成果を出していくのかというところが重要になっていくのではないと思う。地域課題のテーマに関しては、身近に感じやすいこと、FWに出やすいなど、探究の学び方を身につけるといふ点では、良いテーマだと思う。探究が終了した時に成果を出すために発表に注力しがちだが、そこは本質ではなく、探究の結果、新たな疑問が出るということが重要なのではないと思うので、そこを生徒に伝えていきたい。

甲元委員

現場の先生も苦労されていることを我々も理解している。探究的な学びにおいて、いきなり課題発見能力を生徒に求めるのは、難しいと思われる。課題解決法に関する学びを発見して、それをもとに探究していくのは非常に良いかと思う。やったことに不完全さを感じることで、次回より深い探究になるのではないかと思う。また、誰かが“壁”になることで、より先に進む探究活動が可能になるのではないかと思う。

椎木委員

今の教育は、成果主義的になりすぎており、これにより「自分」という存在そのものを自分で理解できていない生徒が増加している傾向を強く感じる。内面の成長に関して、教員の意識を向けるには、子どもたちが内面を見せなくなっているからこそ、成長の軌跡を記録するようなプロフィールを作成することも必要であり、内面と能力との双方の育成が重要かと思う。

柳本委員

昔からやってきたことをやり続けても活力にならない。会社は、新しいことに取り組むことで活力につながっていく。教員も今の社会を知るような、新しいものを取り込むことをしながら、活力を養成していく必要があり、これが教育の鮮度につながる。挑戦していくということに対して、探究は非常に良い活動であると思う。

菊地委員

現場で、いつもやらせていただいている時には、橋本先生にはいろいろと伝えている。確かに、神戸大学との連携が始まってから長期間経過し、地歴科の教え方をどう学ぶかというところが初期の主眼にあったという点を考慮すると、現在の地域探究を支援するという点ではずれがある。しかし、地域の事柄というのは、地理や歴史も必ず絡んでくるため、すぐに変更せねばならないという状況にはない。我々が重要だと感じていることは、教育実習の事前の段階で高校生と関わることができているという点であり、教員を目指す大学生がハードルの低いところから高校生との関わりが持てているというところに価値があると感じている。探究テーマについても、テーマリサーチなどのステップをふんだあとで、自分たちの課題を考える様なスタイルになることで、ある程度予測できるものにはなっていくかと思う。生徒たちが、ICT を活用して、情報を収集することは非常に良くなってきていると思うが、ネットサーフィンでの情報収集に偏っていると感じる。また、現場の人々へのインタビューで聞いた話などを鵜呑みにしがちで、近視眼的になりやすいと感じている。いろんな資料にアクセスする様な複数の情報収集の方法を実践するトレーニングも設けていただけたらと思う。高校生の発想や想像力だと限界があるので、大学での学びの入り口程度になれば良いと感じている。

永野委員

昨年度までの2年間は、市長に提案するという場を設けることが実現できていたが、来年度の実施に関して保証はないのだなとふと感じた。行政は、華々しいところに注目しがちなところがあるので、来年のテーマリサーチが保証されていない点では、ちょっと心配になる。

第1回 カリキュラム開発会議

日時：令和5年6月8日（木）13：20～14：10

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、横山教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭

志方主幹教諭、大和教諭、土居教諭、井上教諭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭

内容：校長挨拶、報告、協議

協議題：今年度の方向性について

CROSS、クリエイション、クリティカルシンキング、探究英語について

【本会の位置づけ】

新学科の教育内容について方向性を打ち出す。

【昨年度クリアになった課題】

- ①「『学際』とは何か」をどのように考えるか。
- ②学際的な学びのカリキュラムについてどのように組み立てていくか。
- ③新学科の名称をどのようにするか。

【今年度引き続き検討すべき課題】

- ①新学科独自の教育活動についてどのようなものを計画していくか。
→学科独自科目「CROSS I～III」「クリエイション I・II」「クリティカルシンキング」「探究英語」
- ②教科を超えた学びの連関性をどのように形成していくか。◆カリキュラムマネジメントの視点
- ③認知の度合いの低い「学際領域学科」をどのように浸透させていくか。◆広報戦略の視点
- ④MIKGE コンソーシアムをどのようにwin-winの関係を保ちながら自走化させていくか。
- ⑤今年度の事業に関する目標を達成させるために、どのような取り組みを進めていくのがよいか。
- ⑥先行実施事業の生徒参加をどのように促進させるのがよいか。

協議内容

■学科独自科目「CROSS I～III」「クリエイション I・II」「クリティカルシンキング」「探究英語」について

- ・生徒の姿を直接見て検討することが必要。生徒の姿を共有する会にしたい。学科独自科目を関連させることが大切。仕掛けをつくる必要がある。仕掛けがなくてもできる生徒もいるだろうが、自分自身で深めることが難しい生徒に対して、無理やり何でも関連付ける仕掛けをつくりたい。ポートフォリオは一つの案。大学院でも2年間の学びを総合化していく（学びを共有する）学修ポートフォリオを作成。無理やり横断していく、関連していくことが、軸に沿ってポートフォリオをまとめることで探究力を深まることを大学院生も実感している。
- ・他校との違いが学科独自科目であり、さらに御影高校の独自性が出るが良い。教科横断の視点が必要。整理するポイントを教員側が示して、生徒が記録を残していくと良い。対話型論証を使って、先輩の探究をトレースすることは、ロジカルシンキングが育つことを探究IIの授業で実感した。自分の意見を深めるために、ディベートをして身に付く力もあるが、未来志向で合意形成という視点があると良い。
- ・大学院での実践報告：学習ポートフォリオに関する用語について。（学びを関連させて意味づけて、自己のアイデンティティを再構築するためのポートフォリオ活動をする。ワーキングポート

フォリオは、日々地震の学びに関するものをファイリング。パーマネント・ポートフォリオは、セクションごとにワーキングポートフォリオから「資料＝エビデンス」を選択し、コピーしたものを入れたうえで、「私の成長・変容」シートを付けたもの。「記録する、意味づける、語る、編集する」という流れでポートフォリオ活動が必要。成長・変容の物語。ループリックは作っていない。探究活動ではループリックがあったほうが良い。

- ・2段構えの振り返りが必要ではないか。（日々の振り返りと学期の振り返り）
- ・御影高校ではポートフォリオは終わったコンテンツになっている雰囲気がある。
- ・記録するものがポートフォリオと考えているので、意味づけすることが必要だ。
- ・語る場、語る時間をつくって、教員が意味づけをすることができればそれがポートフォリオ的な活動になっているのではないか。
- ・語る、というのは教員にではなく、同級生や後輩に語る事が重要。

第2回 カリキュラム開発会議

日 時：令和4年9月21日（木）13:20-14:10

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、横山教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭
志方主幹教諭、大和教諭、土居教諭、井上教諭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭
竹中コーディネーター、東コーディネーター、林コーディネーター

内 容：校長挨拶、報告、協議

報 告：クリティカルシンキング、および、探究英語の検討の進捗について

- 協議題：① 新学科の教育理念・カリキュラム・新たな学びを深めるための有効な教育活動
② 探究科目（「CROSS I～III」）及び新たに設置する学校設定科目（「クリエーションI・II」「クリティカルシンキング」「探究英語」）の具体的教育内容、教材開発、年間指導計画、校内指導体制、評価方法
③ 学際的なテーマについての既存の教科の教科横断型の学びの手法

協議内容

■学校設定科目「探究英語」の改編について

- ・「Creative Presentation」を案とする。論理表現との違いを出すために、表現に至るまでのプロセスを大切にしたい。どのようにインプットするかを重視。スピーチについて生徒間で評価する時間を設ける予定。外部講師については検討中。
- ・探究的な内容を取り込みつつ、運用する。広報でどのように見せていくかが課題。
→クリエーションとクリティカルシンキング、Creative Presentation との3つがつながっているように見せる必要があるのでは。（探究活動の中の英語、国語…というように）
→どのようにインプットするかが重要。海外から見た日本の問題について理解していく、日本とは違った視点を取り入れて活動するのが良いのでは。
- ・論理表現は「調べて英語にして発表する」ことが中心。
→一つの課題を3つの科目で同じように取り扱い、評価することができないか。
→クリティカルシンキングと Creative Presentation で同じ評価をするのは難しいのでは。
→Creative Presentation で、インプットを1からするのが難しい。
→トピックを合わせてリンク付けすることはできないか。
→「貧困」という大きなトピックでやってみてはどうか。
→クリティカルシンキングと Creative Presentation が重なっていることは、何らかの発表をす

る（表現をする）ことであるため、そこに行く過程はお互い違う。クリティカルシンキングは客観的に捉えて、発信する。Creative Presentation は発表で終わらない、その先を重視しようとしているので、そこはクリティカルシンキングにも取り入れられる。

→ワンテーマを設けるか否かは実践してみないとわからない。

→Creative Presentation ではトピックも個人に任せたいので、トピックをそろえるより、プロセスを共有するほうが良いのでは。

→なんでこれを英語で読まないといけないのか…と、生徒は思ってしまうかもしれない。英語で読むからこそ意味がある題材を取り扱えたら良いのでは。

→Creative Presentation の評価段階で、クリティカルシンキング的に考えられているかを見るのも良いのでは。

→スピーチセッションをクリティカルシンキングの中で取り組んでみるのはどうか。

→Creative Presentation がクリティカルシンキングに寄っていくのが良い。国語科で見取っていく。クリティカルシンキングでは読書課題を与えている。「こういうテーマで読みなさい」という指示をこちらから与えられる。

■クリティカルシンキング A、Bに関する学校設定科目

・現在、総合人文コースの生徒たちに先行実施をしている。チームティーチングで読解課題・議論をしている。また、A 4用紙1枚程度の読書課題も与えている。

・論理国語とクリティカルシンキングの明確な違いをどう出すか。

→題材は自由なので、題材を探究と絡めて特色を出すのが良いでは。内容で違いを出していく。

→「クリティカル」にこだわる。「クリティカル」とは何なのか、「批判的」とは何なのかをよく考慮すべきである。“メタ”の部分の裏テーマで設定するのはどうか。総合的な探究の時間で“質問する”というのは、全国的に苦手な傾向がある。そのため、“質問する”という能力を伸ばしていく必要がある。データを読み取る上で、グラフや数値の読み取りといった取り入れることが、特色のある学びになるのではないかと思う。

・外部講師10時間の使い方は？

→読書課題をなぜ出しているのかという種明かしも含めて、講師の先生にその時間設定でお願いしている。

・講師の先生に、探究発表について批判をしてもらい、それを生徒たちが見て、クリティカルの実際を見る機会があればよいのでは。クリティカルと非難は違うというのを感じてもらいたい。

→デモンストレーション的に鎌田氏と若松氏のやり取りを見てもらうのはどうか。練り直し、っこみ合いをしている様子を見て、イメージを膨らませてもらう。質問の仕方や小論の添削の方法を学ぶ機会を設けたい。

→3年生には評論文をどう読むかという授業は絶対したい。

第3回 カリキュラム開発会議

日 時：令和4年10月26日（木）16:40-17:30

場 所：兵庫県立御影高等学校 リサーチルーム

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、横山教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭

志方主幹教諭、大和教諭、土居教諭、井上教諭、橋本教諭、飯川教諭、大西教諭

林コーディネーター

内 容：校長挨拶、報告、協議

報告：文理探究科予定カリキュラムにおける科目名の変更について

協議題：①探究Ⅱの中間発表を受けての感想、助言

② 今後の御影高校の探究の在り方について

協議内容

■探究Ⅱの中間発表を受けての感想、助言

- ・ 去年と比較すると、テーマはすべて統一されていて、良いと思った。問題意識と具体的な問いの関連性を考えると、テーマが大きすぎるところもあった。問いを練り直す過程が今後期待される。
- ・ “人前で発表することと発表をさせられるとではどんな効果の違いがあるか”という発表班に対し、発表の緊張をなくすためにどうすれば良いかという質問があった。班員が、間違えることが怖くて緊張してしまうので、周囲の変容が必要であるという回答をしたのが、学びの深まりを感じられてよかった。
- ・ “校則を変えることでどのような影響を与えるか”という探究テーマを実施している班があった。このテーマは、去年もあったが、今年は校則を変えようということだけでなく、アンケートの取り方が良かった。他校の取り組みも調べていた。
- ・ “過疎地域の解消に高校生としてどうアプローチできるだろうか”という探究テーマで調査を行っている班があった。この班は、過疎地域の解消という広いテーマの中から、空き家問題という狭い視点にフォーカスしていたことが良かった。なぜこの問いを設定しているのかといったこだわりを質問したかった。
- ・ 問いに対して、問題意識を説明するスライドがあったほうが良い。
- ・ 問いから問いへ終わっている探究が多かったのが良かった。さらに、暫定版の結論スライドがあったほうが良い。
- ・ 質問が出ないことが気になる。近年は、大学でも学生の意見が出ない。思っていることがあっても手が挙げられないのが課題だと思う。質疑応答にもう少し時間をかけることができれば、話し合う時間も設定してから質問タイムへと移行することができる。司会者を別に立てて、質問が出なければ司会者が質問したり当てたりできるのではないか。
- ・ 質問については事前に資料を配って、質問を考えさせておいても良いのではないかと思う。司会進行役が教室内の生徒を当てるようなシステムにしても良いかと思う。
- ・ アンケートの結果に対しての疑問が少ないことが気になった。今日の様子を見ていると、生徒達は1つの事象に対する掘り下げのための要素を見つけることができないのではないか。
- ・ 生徒たちは、カリキュラム上、総合的な探究の時間の実施時間が少ない中で探究学習を行っている。生徒たちに対して、“どこのだれがどのように困っているのか”という着眼点を言い続けた結果、過疎地域についての班はうまくいったと思う。全体的に言えることだが、粘り強く考え抜く力がやはり薄い。
- ・ 今日の中間発表を見学していて、問うべきことが問えていないと思った。喫煙問題にしても、“喫煙が悪”という前提に基づいて探究学習を進めている。食育を探究テーマとした班は、実施するイベントまで考えていたが、そもそも、なぜ食べ残しが残るのかという問いが立てられていない。社会課題の解決に向けて思考を深めようと試みているが、そもそもなぜその問題が起こっているのかという課題の根本的な部分と向き合う視点が薄い。人口問題を探究テーマにしている班についても、前提への問いが薄いと感じた。この点には、教員側からのアプローチの方法を考えていく必要があると感じる。